

# 育メンの覚悟と寛容

## Patience and Lenience of a Nursing Father

北條博彦 Hirohiko HOUJOU

6年前のある日、私は双子の父親となった。タンデム型のベビーカーを押して町中を歩いてみて、初めて社会的弱者になった気分を味わった。カートだけでも20 kgほどあるうえ、歩道の段差は結構高く、自転車や歩行喫煙者からも身を守らねばならない。すれ違う人の反応はさまざま。若い女性にとって、双子というのは羨望の対象になるらしい。たしかに見た目には楽しそう。子育てを終えたお母さんたちからは、「一度で済んでいいわね」と励まされる一方、「一人でも大変なのに……」と率直に同情してもらった。対して、たいいていの男性は無視か無関心を装う。あるいは本当に視界に入っていないのかもしれない。

育児を取り巻く環境は人それぞれだから、個人的な体験記はたいして用をなさない。とはいえ本稿の依頼がきたからには、少数派の“育児をした男性”の事例を紹介しておきたい。誤解を招く言い方かもしれないが、育児それ自体はそれほど大変なことではない。問題は、育児をしながらそれまでの仕事のペースを保てるか、ということだ。かねてから時間に余裕をもって働いてきた私だが、二人の育児生活はかなり身体に合った。仮に、一人の育児に一日10時間費やすなら、残り14時間で今までの仕事をこなせばよい。それが二人になると20時間使うので、残りは4時間しかない。双子だからといって忙しさが2倍になるのではなく、3.5倍になる勘定だ。そう考えたとき、さすがに何かを諦めなければならないと思った。

その頃私は大学に移って研究室を立ち上げたばかりで、人手も成果もなかったが、幸いにも予算的には研究所から十分な支援をもらっていた。何とか学生が実験できる環境はあったと思うが、十分にディスカッションする時間が取れなかったのは心残りだ。そんな中で、学生がいろいろ提案してくれた。大容量のネットワークハードディスクを導入し、pukiwikiというオープンソースの掲示板システムを使って、学生に実験報告を書きこんでもらうことにした。私は夜な夜な更新ページをチェックし、データを見ては次の実験を指示す

るという生活を続けた。その3年ほどの間に学生が蓄えてくれたデータは後で論文にして一気に放出した。今では“並の忙しさの教員”に戻ったが、pukiwikiは続けている。日々の書き込みが多い学生ほどいい結果を出す、という傾向が見られるからだ。

その間、民間企業で研究開発に従事する妻も同様に厳しい生活を強いられていたに違いない（実際、会話を交わす余裕もほとんどなかった）。私たちのような職種のものにとっては、育児休業のような制度はあまりありがたく受け入れられない（むしろ育児を休業したい）のだ。代わりに妻は、行政、民間、地域社会のあらゆる人的リソースを探してきて、できるだけ育児とそれに付随する家事を代行してもらえるようアレンジしてくれた。餅は餅屋というわけだ。それでも子どもたちに触れ合う時間が不足だったという気はまったくしない。少しの間、重労働から開放された妻は、育児そのものを楽しんでいるようだった。

最近、女子学生の理系離れを嘆く記事にも自然と目がいく。科学や工学のおもしろさ、職業としての研究者の魅力を存分に伝えるのは教師の責任だが、社会構造を変えようとするならそれだけではすまない。女性の進路選択を変えるということは、社会全体でみれば男性の進路選択を変えるということだ。男性にもそれだけの覚悟が必要だと思うのだが、「父親も家事・育児に参加しましょう」といったトーンでは、そういう緊迫感は伝わってこない。むしろ私が必要と感じたのは、多様な進路選択や働き方、地域社会とのかかわり方を認める寛容さだ。私自身、周囲の人々や組織の寛容さに随分救われてきた。お定まりの就活ルールやキャリアパスに縛られて苦しいという人は、もっと自分に寛容になってもいいのではないかとも思う。双子と向き合いつくづくわかったのは、同じ環境で育てていても個性の発現というのは抑えようがないこと。まして育児書どおりには決して進まないこと。こういうことを通じて私は他人にも自分にも寛容になってきたと思う。



北條博彦 Hirohiko HOUJOU

東京大学生産技術研究所  
准教授、博士（工学）。  
東京工業大学大学院生命理工学研究科博士課程修了。  
専門は超分子錯体化学。  
E-mail: houjou@iis.u-tokyo.ac.jp